
リリカルなのは for FFXI

黒狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは for FFXI

【Nコード】

N0883X

【作者名】

黒狐

【あらすじ】

処女作でございます。

本作品はなのは×MMO FFXIのクロスオーバーとなります。

おそらくは管理局アンチというよりもなのはサイドアンチになる可能性があります。よろしければ後は移動のことよろしくお願い申し上げます。

転生と始まり（前書き）

何かと拙いとは思いますが良ければおつきあいください。

転生と始まり

平凡な世界に転生した。

当初、彼はそう考えていた。

病院暮らしでなかなか外に出ることができず、知識は豊富でゲームにはまり込んでいた彼は、あるはずがないと思いつつも現実をそう受け止めた。

尤も、技術系統は違えど、多くの武具や知識、様々な素材と共に現れたモーグリと名乗る幻獣が訪れたあたりで平凡から大きく遠く事になる。

「なんだか知らないけどご主人様と呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃじゃ〜クポ！」

じゃじゃじゃじゃ〜クポじゃないだろう。

思わずつつこんでしまった彼は決して悪くないだろうと思う。

が、その反面、心強いモノでもあった。

彼は確かに転生をして、『此処』いる。が、それを証明するモノはない。

本当に生前の『彼』としての経験があったのか、あれだけの思いをしてすり込まれた経験は本当に身に付いているのか？

転生当初、彼という存在を自覚した彼がぶち当たった壁と云っても良いだろう。

そこに現れた、なじみの深い謎生物は彼の心に一定の安定性を生み出す事に成功したと言える。

「説明をするクポ！あと、モグハウス協会にご主人様宛の手紙が届いているクポ」

クポクポ言いながらの説明、いや、ありがたいのだがご都合主義を感じざるを得ない。

しかも、手紙って何だ？

彼は、本来、リアリストである。

情報を集め、手札をそろえて状況を進めるタイプといえるのだが、それが整わず流されるのは少々おもしろくない。

とはいえ、情報は欲しいので説明と手紙に意識を集中させると間もなく噴いた。

それはもう盛大に。

なぜなら、いや、まずは情報を整理してあげていこう。

1つに習得していた全てのジョブアビリティ、魔法は使用可能。

2つに上記の制限となるが全てのジョブの活用は出来ず、メインジョブ・サポートジョブに二つのジョブを選択しはめるといふモノ。

3つに預けていた装備を含め全てのアイテムの使用が可能。

4つに育てたスキルは問題なく適用される。これは合成も変わらずメインキャラ問わず最高値が自身に適用されている事になる。

この時点で思わず「どんなチートだ」と呟いた彼の心情はいかほど名ものかは分かりかねるが、まあ、大凡間違っではないだろう。続いて、手紙の内容だが、こちらは驚きを隠せなかった。

【小さき者よ、汝の与えた死に感謝の意を示す。此度の生を楽しむが良い】

【優しき者よ、汝の与えた救に感謝の意を示す。此度の生を謳歌する事を願う】

これだけならば、訳の分からない手紙で終わるのだがそれを許さないもサインが入っている。

プロマシアとアルタナ、一文だ。

生前の彼が最も好んだゲーム、ファイナルファンタジーXIIの神と呼ばれていた者たちからの手紙、もう、何がなんだかわからなくなりそうになりながらも状況を受け入れ、説明をモーグリから受ける。

これで終わりかと思った矢先、考えられないような痛みが彼を襲った。

思わずあげてしまった悲鳴に父親が駆け付け、病院にすぐに搬送され、入院となったがそれどころではない。

意識を失い、夢とも現実ともつかない空間でFFXIで作られた
キャラたちの経験を体に刻み込まれる。

どれほどの苦痛か、など言い表せれるはずもない。

だが、少年はその苦痛に安堵感を覚えていた。

少年ためにいうなら彼がMだからとかではなく、彼が生きていた
という証明を受け取ることができたからに他ならない。

そうして、彼は誕生した。

接触！高町家！！

最初は、普通の人生だと思っていた。

何の因果かは分からず仕舞いだったが、モーグリという使い魔と
いうかペットができて、不思議な力や技術が身についた『だけ』だ
と思っていた。

確かに地獄じみた経験をさせられたが手にしてみれば、それ以上
の価値のあるものだとわかる。

尤も、小学生1年の身でそんなことが起きてもどうしようもない
のだが、ありがたいことに我が家は父子家庭だ。

この体になってからの記憶をたどると4歳ぐらいの時に母親のほ
うが浮気をして発覚、まあ、子供ができた、と言っても父親と子づ
くりもろくすこしないで出来るわけはないし、そもそも、父と母で
はできない血液型だったというから救えない。

そんなこんなで俺には母親がいない。

前世で散々迷惑をかけられた両親は兎も角、忙しいのにもかかわ
らず細かな時間を見つけてはかまってくれる父親には感謝をしても
到底足りぬものではない。

幸にも不幸にも父親がいないため、モーグリの存在を隠すのには
苦労しなかったし、なんとあのなぞ生物、一日バナナ一本程度で十
分らしい。

まして、父親が部屋に入っても隠れてくれるというからありがた
いことこの上ない。

そんな、使い魔？にも恵まれ新たな人生をやり直せるのはこの上
ない幸せなのだろう。

さしあたって、今の目標とするなら、前世の願いである結婚して
幸せな老後を目指しつつ、父性愛を注いでくれる父親と類稀なる忠
誠というか愛情？を注いでくれるモーグリに報いいること。である。
しかし、だ。

懸念があつた。

それも、核地雷級のものだ。

名前が海鳴市という、この土地で入る小学校は風牙小学校…。
悩んだ。

成績では聖祥も全く問題ないと言う幼稚園の先生と強く勧める父親に頭を下げ風雅岡小学校へと「友達と離れたくない」とウソ泣きまでして入学した。

なぜか？

簡単な理由だ。

仮にこれがとら八だった場合で、尚且つ登場キャラクターのいずれかに該当したとしても友好がなければ問題ない。

少なくとも進んで友好を温める主人公ではないし、主人公でなければなあなあで充分対処できる。

だが、『なのは』は違う。

ぶつかり合いながらも絆を深め、どんなことがあっても相手を許す懐の深さを持つ少女。と彼女を評価できる。

裏側としてみてしまえば、何が何でも自分の意見を貫き通すエゴイストと判断しても何らおかしくはない。

それ故に不味いのだ。

彼女はどんなことがあっても『友達』という関係を作りたがる。だけなら良い。

前者と同じく適当な関係を継続できればいい、どうせ中等部なれば離れるのだ。

だが、FFのジョブには『MP』が存在する。

検証は不可能なのだがこれがリンカーコアとなる場合、A・Sで間違いなく狙われることになり、無印であってもユーノの念話や感知能力により有耶無耶のうちに関わりを持たされることになるのだ。

しかも、拒否をすればただけ強く食いつく……どんな罰ゲームかと言いたくもなるのだが、拒否云々の前にそんな状況を作らせなければいいのだ。

頼み辛い条件の相手となることでユーノの交渉を跳ね除け、なのはのすっぱん並みの食いつきから逃げる。

条件を整えるには聖翔などよりも風雅岡のほうが遥かに優れているのだ！

フハハハハッ！

今度こそ、人生をエンジョイさせてもらおう、条件はクリアーだ！

……そう思っていた時が私にもありました。

ネタじゃないのに本当にそういうなんて思わなかった。

だってさ…。

同級生と一緒にいたくない戦闘生命体と6年一緒だぜ？

信じられるか？

6クラスあるのにずっと一緒だぞ？

中学は言っても一緒に呪いか？呪詛状態か？

虐めか？虐めなのか？

そんな呟きを漏らしても罰は当たるまい。

許可が下りるのであれば一日中愚痴を呟ける自信が俺にはある。

さて、今回割り振られた案件は今までで一番ヘヴィなものだ。

このミッションは、こちらの最重要対象 Takamati N
anoha がもつともPOPしやすいエリアであるTakama
ti home に行かなくてはならない。

何せ、あの化け物はトリガーも何もなしにPOPする上に、ヘイ
トリストに載ったら最後、ほかのエリアにいたとしても勝手に沸い
て出てくるトンでも仕様だ。

あんな化け物作った運営がいるとするなら小一時間問い詰めなけ
ればならないのは、決定的に明らかで、如何に力カツとバックステ
ッポしても無理だろう。

「さて、信濃。そろそろ現実に戻ってこのプリントを届けてくれ」
あまりのシヨックに現実逃避していた俺に、クエの発注者である
織部 忠一教諭（34）見合い失敗回数更新中。が声をかけてきた。
ああ、信濃と言うのは俺の名字である。

信濃 信志、これが俺の今回の名前であるのだが、今回は置いておく。

そしてこの、プリントの配達を不幸にも承る原因というのが、あの魔王の城が非常に残念なことに近所なのだ。

「あんな信濃、お前がなんでそんなに高町と接触したくないかは知らん。現に小学校でも相当、手を焼いたと連絡を受けている」

ほほう、まあ、相談などは尤もなので何も言い返す気はしない、仮に避ける理由を言っても頭のおかしい電波君にされる。それは回避したい。

「いじめはない、これは、起きないようにお前自身が気を使っていたのも知っている。だがな、協調性というのは必要以上に大切なものなのだ」

おお、織部が教師っぽいことを言っている！

なぜ、見合い現場になるとドモって何も言えなくなるのだろうか？ 非常にもつたいない気がするが…。

「じゃかしい！ ったく、いいか？ 何があったか知らないし、聞かん、がもつ少し打ち解ける」

思考が発言となって漏れていたらしい、突っ込みを受け反省はするが後悔はしない。

が、入学して2か月でこうも動かれるということは別のアクションがすでにあつたためと考えておかしくない。とみるべきか？

例えば、相手のほうから相談を受けた。ないし、受けているのを知っている。いや、それにしても動き方が若干強硬すぎると思うのだが？

なら、続く場合、何らかのアクションを起こさざるを得ないとこるまで来ているため、今回の件を利用して強硬的にでも解決しよう

としている。とか？」

「途中から、声に出していたが、その通りだよ」

「おや、図星とは面白くない…が、その答えは面白くありませんね、先生」

思考をまとめるうえでよくやる癖ではあるのだが声に出していたあたり、何とも痛い思考の持ち主と思われるかねないので自重したいのだが、織部の回答はそれを許してくれそうにもなかった。

「面白く答える必要はない、必要なのは現実に対応する柔軟性だ」「だからって、それ中学一年に言うセリフですか？」

「妙なところで頭のまわる生徒だと理解している。これも柔軟性だ、信濃」

いいから行って来いとプリントの束を渡されて、職員室から追い出される。

行きたくはないが行かざるを得ず、ポストに入れるなども考えたが受け取りが確認できない、または、手渡しをしない場合、本格的な保護者の介入も予想される。

信志は歩きながら今後のことに関しての思考を巡らせ、状況を把握していくことにした。

現在の状況は、教師の手元に問題が残されているだけだ。

しかし、これは一時的なものとして判断されているため、と、今回の件で認識を改めざるを得ない。

なぜ、こんな状況になったか？分かりきっている。

俺が『高町』に対する接触を拒んだからに他ならない。

説明すると挨拶はするがその程度の友人、最高の状態で知人を目指していたが程無くして状況は大きく変わった。変わらざるを得なかった。

高町家が近くにあったためだ。

これは大変危険である。

HNMである『Takamati Nannya』や『Takamati kyouya』、『Takamati Shiro』

に遭遇する可能性がぐつと高くなる。

まして、親が滅多にいないと知られた場合、劇中から考え接触を図ろうとしてくる可能性が極めて高い。

そして、我が親父殿はその接触をした場合、彼らの提案を受けてしまう可能性が極めて高くなる。

とら八かなのはか図りかねているこの現状で、彼らとの接触は何としても避けたい。

今は、分岐点なのだ。

このレポートを渡される原因となった高町美由紀の欠席の理由は父親の怪我というもの。つまり、高町士郎は死んでいない。

残念ながら、とら八で彼がすぐに死んだのか、病院で死んだのか分からない。これは、俺の記憶があいまいになっているからだ。

さすがに万能人間である自信は無いし、そこまで優秀という自信はない。

高町美由紀にかかわるのはこの件が終わってからにしようと思っていた俺にとっては、都合の悪い話以外の何物でもない。

だが、強制的な接触を図られるならこちらにある程度手綱を握れていたほうがいいには違いない。

「だからとて、喜び勇んで逝きたいくはないな」

因みに、逝きたいは誤字に非ず。目の前にそびえる地獄門を潜らねば高町家に入ることはかなわない。

ぼそりと呟いたセリフはいつの間にか降り始めた雨にかき消され、余計に気を重くさせられながら門徒を叩いた。

しかし、叩いた後でトンデモナイことに気が付いた。

いま、この高町家にいるのはHNMの中でももっとも凶悪な『Takamati Nanno ha』の可能性が極めて高いことに気が付いたのだ。

これがなのはだったら、死亡フラグになりかねないんじゃないの

か？

そう思ったが吉日と、翠屋のほうへ出直そうとした瞬間、地獄の門は開いた。

「おかえり！」

そこにいたのは栗色の髪をサイドテールに結んだ少女。

間違いなく『Takamati Nanno ha』だ。

これが『なのは』であった場合、時間がたてばHNMに成長するらしい。

18人PTとかでも普通に殲滅できそうなHNMだ、いつそリンクシユルでも作って可能な限りの殲滅戦で倒すことが可能なのか検討に移ったあたりで、目の前の少女がこちらを覗き込んでいた。

「あの…?」

なんと言つか、覚悟を決めるしかない。

あとは、以下に交渉をうまく行い、逃げるかだ。

魔王の卵

一人で家に帰ってお母さんが作ってくれたおやつを食べる。
急に暗くなってきた。雨が降ってきた。

怖くて、寂しくて、心細くて、泣きそうになって受話器に伸びかけたのを終わらせて戻した。

私は、良い子だから

そう、高町なのはは良い子でなくてはならない
じゃないと、だれも私に声をかけてくれなくなる。

きつと、お母さんは笑顔を見せてくれなくなる。

きつと、お姉ちゃんはお話をしてくれなくなる。

きつと、お兄ちゃんは頭を撫でてくれなくなる。

それは、とても怖いことだ。

それは、とても悲しいことだ。

それは、とても寂しいことだ。

だから、高町なのはは良い子でなければならぬ

良い子じゃなければ、私にだれも見るとしてくれなくなる。

友達と言った。

ナノハチャンは優しいね。

そうすると、友達のお母さんは言った。

ナノハチャンは良い子だからよ。と、確かにそうだった。

みんな、私を良い子だから誉めてくれた。

なのはは、ナノハチャンで良い子でなければならぬ。

じゃないと、みんなは消えていなくなる。

膝を抱え、恐怖心と戦う。

そんな中、戸をたたく音が聞こえた。

雨の中、誰か帰ってきてくれたのだろうか？

もしかしたら、雨で私が寂しがってないか誰か来てくれたのかも
しれない。

良い子にしていたご褒美かもしれない。

そう思つて、私が明けた戸の先にいたのは見たことのない、制服を着たお姉ちゃんと同じぐらいの男の人でした。

「あゝ、そうだよ、そうなんだよ。なんで、俺はこんなことに頭が回らないかね」

私を見るなり頭を抱えた男の人みて、私はサーっと血の気が引いていくのがわかった。

私がしたのは家族を迎える為のあいさつ。

でも、彼は来客、なら、私が言うべきなのは「おかえり」ではなく「いらつしやいませ」

ではないだろうか？

まずい、私は彼に悪い子と思われてしまう。

そうしたら、彼は私から去って行ってしまう。

また、独りぼつちになつて一人で遅くまで待たなければならない。

そんなのは、とても嫌だ

「ご、ごめんなさつ…ごめんなさい！」

堪らず、私は彼のズボンの裾をつかんで謝り泣いていた。

謝りだすと堰を切つたように涙が出てきて嗚咽が止まらない。

「おわつ！？なんだ！？落ち着け！」

男の人が驚く様に叫んで後退りとしようとしたのがわかり、余計に鳴き声を強く上げてしまった。

「ごめんなさい！行かないで！一人にしないで！」

そう、叫んだ私を少し間をおいてから男の人が初めて優しくなでてくれた。

それでも僕はやってない

なんてセリフを言っても許されると俺は思う。

もつともそれは、この場にいる俺を含めた二人が10年位たたな
いと意味の分からないものとなり果てるだろうが。

ああ、一部の特殊な趣味の方々にはあり得るのかもしれないが、戦闘民族高町に知られた場合、リアルに首が飛びかねない。と、条件を付ける。

見方によれば彼女に別れ話を切り出して、彼氏に縋る彼女の凶なのだが、如何せん、幼すぎる。などと考えていると幼女が震えながら叫んだ。『一人にしないで』と。控えめに見てもこの家は大きい。そんな家に、一人で待つ彼女の心は如何様なものだったのだろうか？フラッシュバックするように病室で伽藍洞になった空間に一人まつ、前の自分がよぎった。負担になりそうだからと言われ、せっかく来た友人知人が面会を早めに切り上げられない様に必死になつて場を盛り上げ我慢した。夜は死の恐怖におびえて過ごした。昼は人はいたが付きつ切りという訳はなく人が恋しくて仕方がなかった。だからなのかもしれない。

そつと、幼女を撫でた。踏み込むのが危険とはわかっているが、この状況で彼女を見捨てたら、きっととはげが残る。笑つても笑えない、許しても許せない日が来る。

なにより、自分に被った人間を見捨てる。そんなことをしたら自信が許せないだろう。

幸いにして、今は幼少期。
手の打ち様もあるだろう。

楽観的とは言うなかれ、うまくいけば場は収まり、学校が上がつていた相談は取り下げられる。逆を言えば、このまま帰れば禍根が残る。それだけは絶対に避けたい。

あー、そこ、腹黒つて言うなよ？
どう見てもよろしくない混乱の仕方をしている魔王の卵に対し、コミュニケーションを試みる。

思い出せ、基本的な対人交渉は一通り学んだはずだ。

前世の学習を無駄にするな、俺！

たしか、目線を合わせるのが基本だったか？

しゃがみこんで泣きじゃくる魔王の卵に視線を合わせて、頭を撫

でる。

出来ることならば、とんずらを使って逃げてみたい誘惑に駆られるがそこは我慢。

なぜなら、これを納めない時点で此処の住人に気が付かれた場合、良い未来は微塵に想像できないからだ。

「はじめまして、信濃信志といいます。高町美由紀さんはご在宅ですか？」

わかりきってるあたり、聞いてみるのは外道の極みということな
かれ、少なくとも確認は大事、いなければプリントを渡して俺は帰
る！そして、モーグリとプリンを食べるんだ！

Oh・my good!

いや、最後の思考が不味いのは知っていたよ？うん、本当に。

えーっ…と、現在、私は今、噂のHNМの巣である『Takama
ati home』にいます。

本当に広く、道場からは今にもPOPしそうな雰囲気がい、で
きることならデジョンでもして家に帰りたいという気持ちを抑える
のが精いっぱいです。

などと、アナウンサー風に報告してみるが状況など変わるわけも
ない。ちくせう…。

目の前にあるのは明らかに彼女の為にとっておかれたと見られる
ケイチが鎮座しており、ぶかぶかのエプロンを占めた魔王の卵…め
んどうなのでなのは通すが、冷たいお茶をグラスに注いでもって
きた。

まあ、なんだ。

びっくりするぐらい緊張してる。

俺もなんだが、なのはがだ。しかも、これはいい意味の緊張では
なく新人とかがミスをやらかす時に必ずやる緊張、つまりはだ。

『自分は失敗してはいけない』

と、言うもの。下らない、実に下らない。

ミス一つなんだというのだ？しない人間などいない、程よく注意し、たとえミスをして補えばいい。

絶対にミスをできないというなら、しない状況にもっていくのが当然なのである。

見てるこっちがハラハラさせながらお茶をテーブルに置くとジーツツとこっちも見てくる。食べさせる気があるのだろうか？

そんなことを考えたとき、小さく腹の虫が泣いた音がした。

無論、俺ではない。序に言うと目の前にいるのはが恥ずかしさで顔を赤く染め、自分の失態に顔を青くするという、絶対に二つ同時にできそうにないことをやってのけている。

「お茶だけでいいから、ケーキ食べたら？」

「いえ、大丈夫です！」

一応、進めてみるが断固拒否の構えを崩さない。

非常に面倒で会話もない。

何処のお見合い風景だ？

「で、だ。お姉さんはいつ帰ってくるのかな？」

「あの、その、えっと…」

てっとり早く終わらせて帰る。

これが最善なのだが反応を見る限りまだまだ先になりそうだ。

少なくとも、描写では相当遅くまで放置されていた可能性が高い。どう見ても育児放棄だが、本人はそれに気が付いていないし周りも同様だ。

「じゃあ、ケーキ半分こしないかい？」

「え？」

「いや、甘いもの嫌いじゃないんだけどこれは多すぎて残しそうだから半分食べてくれないかな？」

回りくどい言い方だが、やむ得ない。

呆けた顔でこちら絵おみているのはに声をかけ、ケーキを半分

に割ってなのはの前に差し出すと嬉しそうに半分のケーキを食べ始めた。

しかし、だ。

姉は帰ってこない。

何時ごろ帰ってくるかなど全く知らないが、おそらく深夜帯と考えていいのではないだろうか？

軽食やパスタを出すスタイルの喫茶店であれば尚のこと遅くなるだろう。

狙っている客層がどこにあるかわからないが、桃子がなのはと一緒に皿を洗う描写があつたはず、と言う事は6時から8時には帰ってきて家事をしていると考えられる。

あくまで家事をしているだけで食事をしていないことに注目したい。

帰ってきているのは母親のみであつて他の家族もいたがすぐに出かけていた。

これは鍛練と見て取れるが、現在の状況でその鍛練を行っているかは不明。

まして、下手に聞けば警戒されるなどの注目度が上がる危険性もあるため却下となる。

ともなれば、離脱したいのだがお茶がなくなるとすぐにお替わりを注ぐのはが問題となり、雑談をしながら隙を見ては帰ろうとしたが「もう少しだけお待ちください」と足止めをされている為、離脱もできない。

どうしてくれよう、この状況。

さらに時間がたち、現在6時。

時間の経過が早いのは何も起きていないからだ。

しかし、ついに動きが出た。

小さく腹の虫が鳴いたのだ！

鳴かせた主は顔を真っ赤にしてうつむいている。

「そろそろご飯の時間だね、申し訳ないけどお暇しようかな？」

ここぞとばかりに帰ろうとすると、目に見えてがっかりするなのはを見て罪悪感を感じないわけではないがフラグなどいらぬ。

「あ、はい、ごめんなさい。お姉ちゃんには伝えておきます」
しょんぼりして答えるなのは、心なしサイドテールが萎れて見える。

ようやく帰れる。そもそも、こう考えること自体がフラグなのかもしれない。

お姉ちゃんの友達は私のお話に相槌をうちながら、いろんなお話をしてくれた。

ところが、楽しい時間はすぐに過ぎるもので6時になるころ、私は致命的な失敗をしていた。1つは晩御飯のことを考えていなかったこと、2つはおやつを分けてしまい空腹になるのが早かったこと、3つめはお姉ちゃんは元より、だれもこの家に帰ってくるわけがないのを知っていた。つまり、嘘をついていたこと。

バレるのが怖くて、お兄さんが帰るのが寂しくて、二人でいる時間が終わってほしくなくて必死だった。

私のおなかの音が鳴ると、お兄さんが帰ると言った。

これは当然だ。もう、おやつも残ってないし、私に用意されている晩御飯ではお兄さんはとても足りない。

そんなとき、電話が鳴った。

電話は翠屋から来てるのを知らせている。

私に一縷の望みが出てきた。

お店が早めに空けるとお母さんは、お兄ちゃんを迎えに出してお店で晩御飯を食べさせてくれる。

きつと、そんな我が儘を願った私への罰なのだろうか？

電話の内容は、そんな優しいものではなかった。

「ごめんね、お店忙しくて今日は遅くなるから先に寝ててね」

「あのね、おかあさん、いまね！」

「今、忙しいから帰ったら聞くから『良い子』にしててね？」

短く私の用件を伝える前にお母さんは電話を切ってしまう。折り返し電話を掛けることも出来るのだが、『良い子』でなければ私はならない。そうなると、電話はできない、すればお母さんを困らせてしまうから、でも、と、考えて後ろを見ると険しい表情をしたお兄さんがそこに居た。

「ひっ、ごめんなさい！許してください、嫌いにならないで！良い子にしますから！！」

私は気が付いたら叫んで泣きついていた。やめなきゃって思ったのに止まらなくてしがみついているとお兄さんの手が動くのがわかる。

ああ、そうか

『悪い子』な私はお兄さんから引きはがされる。はがされるだけならいい、叩かれるかもしれない。

でも、しょうがないのだ。

ただ、怖いものは怖い、思わず身を竦めると頭に手を置かれた。

「落ち着け、何か知らんが落ち着け」

お兄さんはゆっくりと口を開くとなのはにそう言ってくれたの。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0883x/>

リリカルなのは for FFXI

2011年9月27日03時11分発行